信仰・祭祀12

江戸時代の伏見の墓地

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

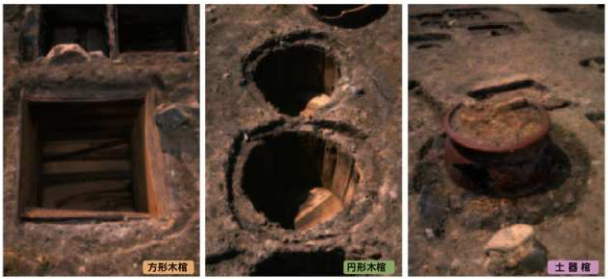
江戸時代後期の墓地（東から）

2009年12月、伏見区総合庁舎がオープンしました。新庁舎の建設に先立ち、2005年夏から約1年間、発掘調査を行いました。ここには江戸時代に創建された真福寺という寺院が昭和初期までありましたが、調査ではこの寺院に営まれた墓地が見つかりました。江戸時代の墓地の大規模な調査は京都では始めてのことです。

見つかった墓地は南北約10m、東西約27mに広がり、北端と南端はそれぞれ東西方向の溝、東端は斜面を削った段差で区画されます。西端には明瞭な施設はありませんが、生け垣などがあったと考えられます。また、本堂は北側に建っていたようです。

墓地には棺を埋めた墓穴が、整然と東西・南北方向に列になって並んでいます。よく見ると、墓穴が二列一組で接近している部分と、列と列の間隔があいている部分があります。間隔があいている部分は、お参りのための墓道でしょう。墓道側を正面とすると、接近している部分は、墓が背中合わせに並ぶことになり、現代の墓地と同様の配置であったようすが想像できます。

埋葬の方法には火葬と土葬があり、遺体を棺に納めて埋める土葬が大部分を占めています。棺には箱の形をした方形木棺、桶の形をした円形木棺、焼物の甕や壺を使用した土器棺があります。棺の大きさは方形木棺で1辺40～50cm、最も大きいもので1辺約60cmです。この中に遺体は膝を抱えて座る姿勢で納められており、いささか窮屈に思えるかもしれません。これは墓地に埋葬された人々の身長推



棺の種類

江戸時代後期の墓地実測図

定値が、男性では157. 9cm　女性では144. 3cmと、現代の私たちと比べると体格がかなり小柄だったからです。また、中には１辺30cmにも満たない小型のものがあります。子供の棺です。円形木棺・土器棺にも大きさの違いがあります。棺の内外には多様な品物が副葬されていました。

墓地は、江戸時代を通じて少なくとも４回の整備が行なわれました。限られた範囲の中に次々と墓が作られたためです。整備にともない墓石などの墓標は壊されたり抜き取られたりして、ほとんどが元の場所に残っていません。しかし、墓石に刻まれた最も古い年号は元和（げんな）５年(1619)であることから、墓地が江戸時代初めに成立していたことがわかります。

また、整備の過程から墓地は中央部から周囲へ範囲が広がっていったことがわかりました。棺の種類は、徐々に円形木棺から方形木棺に移り変わり、最後は火葬が主体となることなど、墓地の構造や変遷に関わる事実が明らかになりました。

遺跡の調査といえば、古墳の発掘調査をはじめとして、墓とはとても深い関係があり、いろいろな時代の墓の調査が各地で行なわれています。その中で江戸時代の墓地の調査は、これまで東京の遺跡を中心に進められてきました。江戸の町が大きくなるにしたがって、寺院が郊外に移転した跡地が市街地となったことから、墓地が遺跡として残されたためです。

伏見で見つかった墓地と江戸の墓地を比較することにより、江戸時代の西日本と東日本の墓をめぐるさまざまな特徴や違いが明らかになることでしょう。

（山本　雅和）